〔研究発表Ⅰ〕

# 表象文化に表現されている長崎文化

山　川　欣　也

〔Presentation Ⅰ〕

# Nagasaki Culture As Represented In Films

YAMAKAWA Kinya

《講師略歴》

山川欣也：長崎外国語大学現代英語学科教授。1986年3月に広島大学大学院地域研究研究科地域研究（アメリカ）専攻修士課程修了。（国際学）修士。専門分野はアメリカ社会文化研究で、最近は1950年代アメリカ社会を映画という視座から覗いています。また、長崎の映画館のはじまりについても調査中。現在、月２回のペースで長崎市民FMの「映画館で逢いましょう」に出演中。

キーワード：長崎、表象文化、国際文化都市

## １．はじめに

今、紹介いただいた外語大の山川と申します。本日はよろしくお願いいたします。いただいた題は、「表象文化に表現されている長崎文化」だったのですが、難しいタイトルをいただいてしまいました。「表象文化」は、私が最近携わっている映画研究の観点からということだと思いましたが、それほど長崎の映画、表象文化について、系統的に研究してきたということでもなく、どこまで他の先生ほど深く掘り下げることができるかということは危惧するところですが、とにかく本日は、長崎は映画がたくさんシューティングされた場所でもありますので、そこで描かれた作品に、長崎がどう映っていたかというようなことを中心にお話をしようと思っております。よろしくお願いいたします。ひとまず、「表象される長崎」というような、ちょっと訳の分からないタイトルをきょうは付けております。

## 2. 九州初の映画上映地から映画の舞台へ

そもそもの、長崎と映画というところから話を始めます。1897（明治30）年5月に、長崎で初めて映画（活動写真と呼ばれました）が上映されたわけです。これが九州で初めての上映会でもあります。長崎に来る前に、下関で上映会があり、そのカメラとスクリーンが九州にやってきた最初の場所が長崎だったということです。熊本でもなく、鹿児島でもなく、博多でもなく、長崎が一番初めだったのです。1897（明治30）年の5月21日に上映会がありますよ、と当時の新聞に広告が載っております。1が『鎮西日報』に載った実際の広告です。2は英字新聞*Nagasaki Shipping List*の5月25日の記事で、3の5月30日の『鎮西日報』には、どういう作品が上映されるかという記事で、割と最初は詳しく書かれています。例えば、最後に“カルタ遊び”とあります。おそらく“カルタ”はトランプのことだと思いますが、さまざまな上映作品が予告され、非常に盛況であったとされています。ただ、映画が上映されたのは、当初は、今、われわれが映画を見ている映画館というのはなかったので、それまでの娯楽の中心であった、お芝居とか、講談とか、浪花節とか、それから落語などが興行されていた、そういう芝居小屋、演芸場、寄席というような所を、今から見れば、映画館に見立てて上映をしていたということになるでしょうか。

日本で一番初めに常設の映画館ができたのは浅草（1903（明治36）年10月）で、当時、「電気館」と言われていたのが今の映画館に当たるものです。長崎で初めて映画の専門的な小屋ができたのは1910（明治43年）8月で、これが長崎最初の活動写真の映画館（名称は「電気館」）でした。今の浜町のアーケードの、「ココカラファイン」でしたでしょうか、薬局がありますが、そこから「スターバックス」がある電車通りに抜けていく細い道がありますけれども、あの路地の中程から電車通り寄りぐらいに「電気館」という名の常設映画館が最初に造られました。そこはもともと「千鳥座」という寄席だったのですが、それを活動写真専門の常設映画館に変えました。それまでは、芝居小屋や演芸場といった場所は、ゴザを敷いて見ていたわけですけれども、この「電気館」は4人掛けの椅子席を導入するなど、非常にモダンな内装で造られていたことが分かっています。

それでは、実際に、長崎が映画の舞台になるとか、長崎でロケーションがなされて映画になった作品のリストを、非常に細かくて申し訳ないのですが、プリント配布しています。長崎を舞台として、あるいはロケーションで、とても多くの作品が作られています。一番初めが、先ほどお話をいたしました、長崎で最初の映画上映が行われた1897年のほぼ一年後、1898（明治31）年に長崎でロケーションされた映画であるということが分かっています。この年、エジソン映画会社のカメラマンとプロデューサーが、東アジアで撮影旅行をしたのですが、上海とか香港とかを回り、日本にも立

ち寄りました。その途中、長崎の港でカメラを廻して撮影をしています。この作品をちょっとこの先、紹介したいと思います。

ただし、第2次世界大戦が終わるまで、長崎で映画の作品というのはほとんど制作されておりません。それはこの1898年頃から次第に、長崎はいわゆる要塞地区に指定されたことが関係していると思われます。後に、戦争が激しくなっていくと、特にそうなっていきますけれども、下手に写真を撮るとか絵を描くとかできない状態になっていきます。もちろん映画も、やはり長崎のどこでも撮ってもいいというような状態ではなくなってしまいましたので、第2次世界大戦前に長崎でロケーションされた映画というのは、ほとんどありません。もちろん長崎を題材にした作品というのもあったりはしますけれども、それはどこかスタジオで、長崎に見立てたセットを組んで作品を撮ったというようなものになるかと思います。例えば、リストの中にもある『雪之丞変化』というような作品は、長崎でロケーションしたわけではなく、東映の、京都の撮影所で長崎に見立てて撮っているということになります。

戦後になってからは、長崎で非常に多くの作品が撮られています。長崎のロケで長崎が舞台ではない､非常に珍しい映画も稀にあったりします。それが『レ･ミゼラブル』というタイトルで、東横映画が作った1950（昭和25）年の作品です。もちろん『レ･ミゼラブル』自体は非常に有名なのですけれども、この映画は見たことがないので、内容がつまびらかにできないのですが、有名な早川雪洲をはじめとして、映画の出演者たちが長崎にロケーションに来たというところまでは分かっています。ただ、長崎のどこでロケーションをしたかとの詳細は分かっておりませんが、この映画が長崎でロケーションを行った、戦後最初期の頃の1本だということは言えます。

1956（昭和31）年に、日仏合作ですけれども、長崎で『忘れ得ぬ慕情』という映画の撮影が大々的に行われ、この映画は日本のみならず海外でも公開され、長崎が有名になった映画の1本で、長崎の名前が世界中に知られるという、一つの大きなきっかけにもなった映画になるかと思います。画面の写真､右下がロケーション撮影です。左側の写真の真中にいるのが岸惠子さんですけれども、これは長崎駅です。長崎駅とか、それから、中心街、また今のセントポール通りの上、資料館があるようなあたりでもロケーションをしています。ロケーション撮影の中心は三菱の造船所、それから居留地あたりですが、長崎での一大ロケーション映画としてはこの作品を最初に挙げることができるかと思います。

## ３．被爆地長崎の国際文化都市化

そろそろ本題に入りまして、長崎は、1945年8月9日、原爆投下によって、厳しいダメージを負うことになります。戦争が終わって以降、長崎の戦後復興が取り組まれ

ていくことになりますけれども、このとき、広島も同じような復興計画の中にあり、1949（昭和24）年に両都市同時に法律が制定されました。長崎は、国際文化都市建設法によってその対象となっています。広島のほうは、こちらは国際文化都市建設法ではなくて、平和記念都市建設法という法律が制定されました。後から、また言及するかと思いますが、つまり長崎と広島は同じ被爆地でありながら、広島は平和記念都市としての道を歩み始める。一方、長崎は国際文化都市としての道を歩むことになりました。

たまたまなのかどうなのか分かりませんが、1950（昭和25）年に、毎日新聞社が主催した「日本観光地100選」という投票が行われ、都市部門で長崎が1位に選ばれたことがありました。もちろん、長崎の地元の人も一所懸命これに関わったと思いますけれども、投票で1位に選ばれました。詳しいことはよく分からない、ランキングがよく分からないところもあるのですが、2位が埼玉県の秩父だったそうです。国際文化都市建設法が可決された翌1950年に、長崎が観光地として魅力ある場所だと選定されるということが、実際に国際文化都市建設計画が決定されていく中で、長崎が観光文化都市としての道を歩み始めることに影響したのではないかと思います。ただ、1952（昭和27）年に、初めて原爆犠牲者の慰霊祭が行われたのですけれども、戦後7年たってから行われています。そうしますと、長崎は観光文化都市という側面と、それから被爆都市という側面の、この二つの側面というものを背負って、戦後、ここから歩んできたということになるのかなと思います。

では、実際、映画に、どのように描かれてきたかということで、もう時間がだんだんなくなってきているのですけれども、大きく分けると、これは私の個人的な分け方ですけども、簡単に言えばやはり、原爆を主題にした映画とそれ以外の映画、というように大きく分けることができると思います。原爆を主題とした映画は、配布プリントのリストに四角を記しています。白抜きの四角を付けたのがそうなのですけれども、こういった作品は原爆を、ある意味、正面からテーマとして描いている映画だということが言えます。戦後すぐで言えば、よく知られている『長崎の鐘』、ずっと後の『TOMORROW 明日』、そういった作品に付いています。それらはやはり正面から被爆、原爆というものをテーマとして描いています。それ以外の作品では、原爆はどう描かれているかというと、かなり間接的、非常に後ろに下がっているものとして描いて、どちらかというと、観光です。観光というか、文化都市としての魅力というものを中心に描かれている作品が、特に国際文化都市計画が進んでいく、50年代終わりから60年代、さらに70年代の初めぐらいまでが、そうした作品が多いように思われます。

では、ここで、冒頭で申し上げた、エジソン映画社の撮影隊が1898年に、中国か

らの帰りの船が長崎で、蒸気船ですから燃料の石炭を補給した際に撮ったと言われている映像作品をご覧いただきます。もちろん、音はありません。

（映像：艀から船へバケツリレーよろしく石炭を積み込む人たち）
［S.S. “GAELIC” AT NAGASAKI　Thomas A. Edison 1898-38255］

今、姫野先生が『長崎新聞』に「写真に見る115年前の長崎－日露戦争時代－」を連載されていますけれども、8月ぐらいだったでしょうか、長崎港の写真の回があったと思います。入港した大きな船に向かって、艀をこいでいる写真があったと思います。大型船が長崎港に入ってくると、こういうふうに石炭を積んだ艀がいっぱい大きな船の周りにいて石炭を補給する、そういったことが常に行われていました。当時、世界で最も良質な石炭を、最も安価に供給できる所として長崎という都市は知られていたのです。特に、港に近い高島炭鉱は非常に良質な石炭を産出することができたと言われています。高島炭鉱といったら、グラバーです。グラバーが掘った高島炭鉱の最も良質で、最も安価な石炭、そうした安価な石炭というのは、映像に観るこうした労働者たちによって提供されたものだったということは言えると思います。ただ今、ご覧いただいたのが、長崎だっていうのは分からないです。ほぼ労働者しか映っていませんから、分からないのですけれども、エジソン社の作品カタログではタイトルがそうなっています。

かなり時間がなくなってきたのですが、次に少しお見せするのは、東宝作品で1963（昭和38）年に制作された俗っぽい映画で、『続・社長漫遊記』です。長崎の風景が出てきます。ちょっとご覧いただこうかと思います。

（映像：「花月」、眼鏡橋、グラバー邸）

稲佐山ロープウエイから長崎の街を俯瞰し、その次に大きな赤いちょうちんが映って、「花月」というのは分かるわけです。それで部屋の中ですけれども、手前に和室があって、奥に洋室ですが中華風でもあるという、当時の日本でそんなにあちこちにあるような造り、内装でない空間が映されています。それから、次は眼鏡橋です。人が出会う場所として、やはり眼鏡橋が出てきます。その後、どこが出てくるかというと、当たり前のように、グラバー邸です。そして、そこでやはりどういうことになるかといえば、いわゆる『蝶々夫人』です。『蝶々夫人』のオペラの一節を、主人公の森繁久彌がピンカートンになり、蝶々夫人になった草笛光子とともに朗々と歌うという、グラバー邸の妄想場面につながっていきます。

次に取り上げるのは、1967（昭和42）年の東映東京作品、『喜劇急行列車』という映画があります。これは国鉄とタイアップして作られた映画で、東京と長崎を結ぶ特急「さくら」を使い、「さくら」号の専務車掌をしている渥美清を主人公として描かれた人情喜劇映画です。最初、東京から始まり、車中もずっといろいろなことがあり、目的地長崎に着き、さらに長崎でもいろいろなことが起こります。少しご覧いただこうかと思います。

（映像：長崎到着のアナウンス）

今の浦上から現川経由の長崎本線はまだありませんので、長与、大草のほうから回って、列車が走っていた頃です。この後、渥美清は昔、好きだった女性と長崎でデートをするわけですけれども、それが次の場面です。

（映像：グラバー邸）

やはり、グラバーが出てくるわけです。ここでまた、先ほどの森繁久彌と同じように、渥美清が『蝶々夫人』の一節を歌う。また、二人が話しているデートの場面で、相手女性の佐久間良子の後景に教会が映り、渥美清の後景にお寺が映るといった、長崎らしい撮影が入っています。ですから、割とパターンは大体決まっていて、出てくる所も大体決まっています。ただ、若干違うのは、このシーンの前に、専務車掌の渥美清と同僚の男と、2人で平和公園に行くのですが、平和公園という場所の意味を一言も言わないのです。北村西望の平和祈念像が映っているのですけれども、それにも全く触れないのです。その場所が何であるかということは、2人の会話の中には全く出てくることはないのです。そういう、平和公園という所に行くのですけれども、そこの描き方っていうのは全く、つまり被爆というものをテーマにしているものとは異なる描き方をしています。それは、先ほどの『続・社長漫遊記』でも同じです。

さらに、お見せしようと思っていたのが、1965（昭和40）年の東映東京作品、高倉健の『網走番外地望郷篇』という、長崎を舞台にした映画です。主人公の高倉健は長崎出身ということになっており、母親の墓参りに来て、昔お世話になった組に身を寄せるのですが、抗争に巻き込まれる、話自体はよくあるような映画といえます。その中では、興味深い場面として、駅前の二十六聖人記念碑が出てきますが、平和公園は登場しません。墓参の場面で、崇福寺が出てきます。ですから国際文化都市としての長崎っていうものが描かれています。50年代、60年代の映画というのは、もしかすると皆さんが長崎に見たいものを見せて、見たくないものを見せないという、その

ような描き方をしていて、非常に明るい、プラスの長崎というか、観光文化都市としての、そうした場所としての長崎というものを映画というのは描いていたように思います。

## ４．おわりに

長崎という場所を、日本の他の地域の人たちにとっても、異国というか異空間でしょうか、異空間イメージみたいなものに見立てて、そこに異国情緒を感じつつ、長い歴史と伝統、またロマンというものをそこに見るのかもしれません。1964（昭和39）年にならないと、海外旅行が自由にできないという状況でしたので、この60年代ぐらいまでは、長崎に行くことによって、いわゆる外国の気分というか、海外旅行の気分みたいなものを味わうということが、もしかしたらあったのではないかと思います。そこで得られた長崎のイメージというのは、後々のイメージ、一般的な長崎のイメージとして定着していったのではないかと思いました。

先ほどちょっと申し上げたように、国際文化都市となった長崎は、被爆、原爆が、観光に包摂されてしまう複雑さという、このことをどうしていくのかという困難さを持ちました。その当時もやはり、議論になったということです。国際文化都市として歩み続ける一方で、被爆平和都市でもあり続ける長崎という街、都市を、これまで長崎はいかに体験してきたのかということ、このことがこれからさらに重要になるのではないかと思います。それで、適切な言い方ではないですが、明暗のイメージが混在している長崎なるものを、これからどのようにつないで、紡いでいくのかということは、非常に大切で必要なポイントかと思います。

最後に、歴史的な記録を残していくことが、これまではできていたわけです。例えば、被爆者の声とかっていうものは記録に残していくことはできたわけです。これを残しとどめることはとても良いのですけれども、次はそういった記録を残していって得られた記憶を、これをさらにどういうふうにして残していくのか、記録として残していくのかということも、これもまた重要なことになっていくのではないかと思います。ただし、明るいイメージと暗いイメージっていう長崎ですけれども、先ほど、センター長からもあったように、長崎は多様性を非常に豊かに育んできたというところがあるので、そういった問題や課題は、これからも何らかの形で、長崎は十分に解決していくことができるのかなというふうに期待はしています。

ただ、先ほどの平和都市と、国際文化都市って、広島と長崎が違うという話をちょっとしたのですけれども、長崎は非常に困難で、広島は非常に分かりやすい。平和都市として分かりやすい。それは原爆ドームがあるからです。原爆ドームがあることによって、平和記念都市としてのイメージっていうのは非常に強いメッセージを発すること

ができるわけです。長崎は、下手に言ったら語弊がありますけれども、歴史的、時間的長さ、豊かな伝統というもの、古来の文化っていうのがあるが故に、非常に難しい性格を帯びざるを得なかったのかなというふうに思いました。すみません、最後ちょっとまとめ切れないまま、長くなってしまいました。私のほうからは以上です。ありがとうございました。